

# 蒼月日乗 1

2017年4月27日～

堀田展造



「日乗」と記されたこの日記には、不思議な居心地の良さがあります。知らない家に入り、いくつかの部屋を歩き、台所の冷蔵庫や書斎の机の抽斗を明けてみたりするような。あげくに埃をかぶったレコードを聴きながら、ソファに腰をおろし、家主の愛読書を読み、お気に入りの珈琲までいただくような。

しかしそれは誰もいない家に忍び込む愉悦とは少しちがうようです。そこはけして誰もいない家ではなく、この日乗を書く筆者はもちろん、その妻や息子も行き来しているからです。どうやら筆者は写真館の主で、ときとして風景の中にゴーストを感じてはシャッターを押す写真家なのですが、はじめは彼が何者なのか？ どこに住んでいるのか？ いったいいつの話なのか？ わからないことばかりです。わからないまま、読者はゴーストの彼の日乗に同行することになります。

家のなかのたわいもない日常、家族との会話、写真館での仕事、通勤の道すがらの雑感、日々に読む本や耳を傾ける音楽。過去の記憶や考察。ひとつひとつはさしたる結論を持たないさまざまな事象が自由に積み重ねることによって、ゴーストは得体の知れない城のような建築に迷い込んでいます。まるでルドヴィヒのノイシュヴァンシュタイン城のように。増築に増築を重ねて作られる迷宮。

もはやそこになにが書かれているかではなく、どこに書かれてゆくのかという不思議な魅力。モンタージュのような自由な積み重なり、増殖の感触そのものがこの書物の魅力なのかもしれません。そして次にどんな部屋が顕れるのか？ やがて廊下を歩くことが愉しくなって来るのです。

そう言えばこの日常の記録には、階段や呼び鈴、蛍光灯やパイプ、さまざまな物を直したり、修繕したりする記述が散在しています。それはノス

タルジーではなく、手をいれることでささやかに生まれる変容。古びた城の廊下は、そのようにして自ら新たな先（未来）をつくり出すのでしょうか。どんな部屋があるかではなく、部屋に何があるかでもなく、部屋をつなぎ自在に変容しようとする廊下こそ正体。「また作り直しだ」のひとことがゆたかに響きます。

たぶん廊下はどこにも通じていません。僕もついつい書いてしまいました。人が、人という生物はついつい部屋という目的を求めてしまいます。部屋がなければ廊下はない。でもたぶん実は部屋へ向かう廊下こそが最高の「部屋」である可能性があるということです。もしかしたらそれは時間というものなのかもしれません。日に乗るように。だとしたらゴーストは、自由にページをひらき、好きなように読み飛ばし、またさかのぼり、何度も同じ部屋を訪れては読み返すことができる読者。目的を求めないバガボンド。この日乗という乗り物はそんなバガボンの彷徨を許す、はからずもな廊下のようなようです。

そんな無限の廊下を築くにはおびただしい量の日々の煉瓦が必要です。描かずに記述するリアリティもかかせません。図らずに置いてゆく気安さ。気になったどうでもよいことを拾う反射神経も大切でしょう。でもたぶんそれらはすべて堀田さんの持ち物だと思います。未完でなければ完成しない長い廊下を楽しみにしています。

(はっとりじゅん 映像・ディレクター)

2017.4.27 (木)

秋海棠は断腸花の別名。荷風『断腸亭日乗』を倣い『秋海棠日乗』とするかどうか。荷風の誌名には居所を指す『亭』があるが、あえて無しにする。日乗とはいうまでもなく、日記、日録のことだが果てして文字通りの日々の記録となるかどうか。別案の『蒼月日乗』とは小比企の庭に由来する。自作のオーディオ小屋の戸口の上に「蒼月香梅庵」と彫った板切れが打ち付けてある。二度目の退院日翌日つまりこの名標の制作日である2016年2月2日の日付もある。前年の暮れに植えた梅の苗木は今は3メートルは越えている。

「秋海棠」についてネットで調べたら山中智恵子さんという方の文章に出会う。本居宣長の和歌が引用されている。

『短歌行』 山中智恵子

「ここ過ぎてわが夏の門こぼれたる秋海棠を晩節となす

『自撰歌』 秋海棠といふ花をかきたるかた 本居宣長

色も名も唐くれなゐの花のつゆかけそめて見む倭ことの葉

色も名も唐(から)めいた「秋海棠」の花。その花についた露に掛けて、「やまとことのは」すなわち和歌を詠みかけてみよう、という。花の画に添えた賛である。」

花の画と対になるらしい本居宣長の和歌を勝手に言い換えてみる。

色も名も唐くれなゐの花のつゆかけそめて見む露のことの葉

花の雫、雫である言葉、つまり滴り落ちる「対象なき語」としての雫、イメージとしての花。画はない。雫の言の葉は果たして唐紅の鮮やかさを呈するだろうかとの願いをこめて。歌人はこの花を晩節の徴と見ているが。露、雫とは運命、重力、大地への運動。つまり、そこに滴りつつ一つになる運動の最中にあるアイデンテティのことだ。

秋海棠の花そのものについても調べてみた。葉の形はハート型。玄関脇の群生する葉も同形だ。白、ピンクなどの連なった花が咲くらしい。道端などでよく見かけるあれがそうなのか。ところが「色も名も唐(から)めいたくれなゐの色」については書かれていない。形容詞は実在しない？



上の写真は 2017 年 4 月 20 日ごろ撮影。カメラの記録によると午前 1 時 10 分とある。寝る前に庭に降り立つ。いつの間にか梅の苗木が背丈を越え、裏山から見下ろすと大人の樹のように立っていると見える。夜更け、庭灯の明かりの中に生気みなぎる葉群れが浮かぶ、と感じた。

本日は、俺の連休日だ。お宮参り撮影の予約がある。「休んでいいよ」

と達思がいう。一日家に籠っていた。『秋海棠日乗』の構想で半日過ごす。玄関に呼び鈴をつける。二三日前作った庭焼き竈の灰をかきだし、物干し台柱の周りに捨てる。昨日は裏山手すり用角材、階段踏み板のタール塗り。まだ乾燥していない。考案中の店のガラススタンド看板の材木調べ。『高音領域』38ページ書き直し。

(机上に置いた本)

バタイユ『非知』

ユイスマンス『大伽藍』

安部公房『箱男』『笑う月』

ミシュレ『鳥』

『秋海棠日乗』は読書ノートでもあるだろうか。でも読書ノートをつけながら読むというのは、正直めんどくさい。というより脅迫と向き合う研究者みたいな読み方は嫌だ。そうではなく一語も見落とさずに読むべきだ。気楽な飛ばし読みは失礼そのものだと心しよう。

2017.4.28 (金)

晴れ。3連休三日目。午後から店に行こうか迷う。ホームページの書体研究と看板資材の発注の仕事がある。

道具小屋の庇にぶら下がっていた蜂の巣を達思がシャベル一撃で取り払った。小さな房室が9個位まで出来ていた。何日も巣作りにへばりついていた親蜂ごと暗い庭土に払い飛ばした。危険だという。その後、小さな巣房はそれなりに面白そうなので二人で探したが暗くて見つからなかった。今朝庭の端の雑草に混じって薄茶のそれが転がっているのを発見する。そっと拾って広口のガラス瓶に入れる。軽くてフワフワしている。写真に撮った。庇を見に行くと運よく逃げのびた親蜂が元の巣跡に戻って早くも新しい巣作りに夢中だ。房室はまだ一個。危害の心配がなければ応援してやるのに、と息子と話した。

結局、店には行かず暗くなるまで裏山の外階段作り。朝から始めて飯も食わず 7 時間ぶっ通して大工仕事。築 50 年の他人の古家が自分たちの家に変身していくと実感するがそれは腰痛をかばう強弁に近いかも。息切れだ。外階段が完成すると二階寢室の縁側から直に裏山散策が出来る。夕方帰宅した賀津子が「あっと驚く出来だね」と言う。

朝読んだ安部公房『笑う月』所収の『公然の秘密』のことが思いの中に淀んでいた。「弱者への愛には、いつだって殺意がこめられている。」という。宗教教義のことは知らないが小説の言辞として一方的な主張にすぎないのか、普遍的でリアルな主張として成功していると言えるのか。このことについて少し間をおいて考えてみたかった。誰もいない裏山での力仕事はその間を埋めるのにちょうどいい。「弱者への愛」が、ほぼ同義語であろう偽善・偽徳を包む語義の拡がりと言うだけなら、暴かれる危険を避ける両義的な無難な言い方で、急斜面である裏山の急造の歩道を覆う枯葉のクッションをその隠喩の役所に当てたくなる。公房は直截に「いつだって殺意が込められている」というが、タイトル同様、隠されているのか、むき出しなのかはよくわからない。さらに「殺意」は称賛されているのか非難されているのか。いずれにしても「弱者への愛」の心地よい響きは急斜面を転がるように危うい。本当は崖であるのに愛を絡めたあざという言葉が醸す酷さの気配、熟爛した腐葉の酸臭が欠点のない一括りの言葉から放たれている。そもそも「弱者」とは何だ。何という言い方か。うっとりとは一括りにする言い方、一方的な語感だ。そのこと自身が腐敗と残酷を孕む。さらに鍵概念として無頓着に暴力的に使用することの二重の残酷さに対してまったく鈍感な政治家・マスコミ・活動家・社会学者たち。恫喝を易々と信じた半生。クッションの腐れ葉に覆いつくされた半生。スコップを力任せに土に突き刺した。



先週あたりまでは冬の枯れ枝のままであった裏山の立ち木がいつの間にか生々しい緑樹に変身している。枝先の若い芽が青空に突き刺さるようにも見える。

#### 2017.4.29（土）

午前中は晴れていたのに昼過ぎ突如ビルも揺れるような大きな雷音に驚いた。店の二階のいつもの剣道稽古の足音が特段に激しいせいかと訝った。ところが予報では今日は「バケツの水をひっくり返す」ほどの大雨だと達思がいう。落雷音が過ぎると大雨はいつ降ったのか全然気がつかなかったほどガラス扉の外はすっきりと青空だ。本当に雨だったのか。やはり剣道の稽古ではなかったのか。（後日確かめると剣道の稽古なんかしていない、2歳になる息子がリビングを走り回っているんだよと剣道五段である二階の住人が言う。）

#### 2017.5.1（月）

晴れ。午後に瞬間的に天気雨。朝 10 時前に店。その後から賀津子が出勤。休日にあたる達思が 2 時から小一時間ほど「検品」のために出勤。その時間に合わせて電動ドライバーの買換えのためにホームセンターへ。



本日より午後6時30分閉店とする。30分早いだけで天地の違いを感じる。家族写真の撮影があり、いつもより遅い6時ごろまで仕事。夕飯の買い物のために賀津子が先に帰宅する。先月あたりから俺が献立の提案係りになっている。

この日記を始めて判ったことだが、書く事があまりにも多い。書ききれない。いずれ書くために項目を列挙だけしておく。公房の短編のこと、蜂の巣のこと、昨夜聴いたブラームス弦楽六重奏曲第二番のこと、そして新たにわかったと思う肉体労働に似た書くということについて、その他こまごまとしたこと。書ききれない。

バイオリン、ビオラ、チェロ各二台計6台、六重奏曲。砂浜を裸足で踏むもどかしさが最後までまとわりつく。憂鬱な波の運動が基調だ。バイオリンが奏でるゆったりとした主題旋律が他の楽器でも浜辺の波のように繰り返される。憂鬱な、と書いたが、実はいくつもの形容詞が次々につきまとう曲だ。やるせない、優しく時に激しく、等々。聴く者の心情にまとわりつく形容詞が曲の真髄でもあるかのようだ。昨夜は疲れていた。西葛西では毎夜の暗室作業の合間に「耳にたこ」レベルで何百回も聴いていた。あの頃はむしろうっとりとして嵌っていたように思う。あまりに嵌っていたから形容詞的な音楽だとは感じなかったのか。ともかく丸ごと美しく心地よいと感じることが、当時の暮らしの課題に立ち向かうべき底の力として自らを掻き立てる心情に相応しいと思ったのか。あの頃は疲れは知らなかったのかもしれない。

今、少々疲れていると自覚している時に聴いて、似たような感覚を経験すると、結局形容詞的な音楽というのはそういうものなんだと納得する。心地よくともそれだけだ。BGMが耳の周りを通過する。ところがシューベルトはととてもこんなものではない。明快な展開なのに、流れの把握とその音的形容の言葉が追いつく間もなく音の目指すものがどんどん深淵に

逃げていくのがシューベルトだ。以前悪訳すぎて読み進めなかったアノルドが「底知れない悲哀の感情」と書いていたことを思い出す。底知れないとは、音楽は暮らしと心情を後押しするなんてことには無関心だということだ。悲哀は端的に美しい。

心情に関わりなく、楽曲の主題、旋律の展開というよりそれらを構成する音の響きそのものに感覚を直結させて聴くものを酔わせる。形容詞と形象は語源に近いが音の形象は明らかに異質なものだ。間違いなく不可視の音物質の世界そのものに触れるという驚きがある。音の剃刀が緩んだ神経を切開する。疲れていようと暮らしも心情も強制的にリセットしゼロに落とされる感覚だ。音に膨らんだ耳が外に転がっているように感じる。そのことは判っていてあえてブラームスのあのたゆとう少々退屈な泥旋律を懐かしいと思ったのは、やはり疲れているのか。音楽好きの妻がうっとりし暮らしを彩る気楽な形容詞、それもいいものだ。

## 2017.5.2 (火)

晴れ。本日より開店時間を10時30分。かなり余裕を感じる。銀行へも立ち寄ることが出来る。店前の裁判所跡地に作業車が二台。何かと見たら普通に雑草刈の作業だった。

発車前のバスの扉の前で何かの会合の帰りらしい初老の二人の婦人の「会話」が聞こえた。「あんた、年寄なんだからもっと便利な街に住めばいいのに」「…」「八王子は空気がきれいなの?」「…」会話というより一方的な言い方に聞こえるが言われた方は「楽しかったわ。また会いましょうね」と閉まりかける扉口に足をかける。その間際の声にちょっと驚いた。「あなた、名前は?」同じ会合の仲間らしいが双方とも名前はまだ知らないと見える。

さて、例の安倍公房『公然の秘密』について。沼地から這い上がる飢えた仔象をめがけて橋の上の群衆が「可哀想だ」と食べ物を与えるつもりでじつは真逆の期待をこめてマッチやガスライターを投げつける。仔象は感謝の表情でめぐみものを口にしつつに「古新聞のように燃え尽きてしまう」。この情景に続く安倍公房の衝撃的な言葉が先の『弱者への愛』には、いつだって殺意がこめられている」だ。一見して「弱者への愛」というスローガンの欺瞞と群衆の残酷な行為を告発しているかのようだ。だがこの短編のどこにも「残酷」だという非難の言葉は見当たらない。殺された仔象にしても酷い仕打ちに抗ったわけではない。も

公房はこの事態に上の評言のほかに特別の解釈を加えてはいない。つまり『公然の秘密』のタイトルとおりに事実をあからさまにただけだといわんばかりだ。秘密とはいうまでもなく「弱者への愛」のこただ。しかし暴かれない秘密、謎だとしても、愛を裏切り残酷な弱者いじめだとあまりにも単純に告発する話だとすれば謎は謎でなくなる。平凡な社会的事件として法が登場し文学はドキュメンタリーに墮する。公房が簡潔な描写で口を噤んだのは謎を謎として温存させるための戦略なのか。

「公然の秘密」の裏に隠された沈黙の刃を光らせているとも読める。すなわち「弱者への愛」とその欺瞞という受けのいい仕立てに刃を突き立てその背後で公房はもっと大きな関心の的であるべき地平を語らずに示しているのか。

象ははじめは骨、怪物あるいは植物めいたものとして形をあらわす。公房の文学世界の地平は、この不可解、奇異な心象、世界の表層において語られる。せいぜいマッチを弄び喜んで死んでいく象と快哉する群衆の関係は、空しいスローガンとお祭り騒ぎの中で絶頂に達する慰めをむしろ必然とする（欺瞞の）いわば出来レースみたいなものだ。世間の合意の前提である弱者への愛とともに怪物相手の殺意も不問のまま公然の出来レースとしての表層に覆われ、作家の目には謎は逆に怪物めいた現実の地平におぞましく繰り広げられていると映る。まさに公然の秘密として。

ところで現代は「弱者救済」をめぐる動いてきたとすれば、公房が「弱者への愛」というスローガンを槍玉にしたことは別の意味でも大きいと思うのだが、何十億人の何十億倍もの人類を動かしたこのテーマにいつか取り組むことが出来るだろうか。いやその前に、涎を垂らして一言でいう「弱者への愛」が殺意であるという真意とは、テキストでもなんでもひとまとめに括ることへの強烈な非難と軽蔑だと読めないだろうか。愛を語るのなら、飛ばし読み、無難なひとまとめではなく、一言一句おろそかに出来ないはずだ。

### 2017.5.3 (水)

晴れ。朝夕の寒暖差がはげしい。本日よりカーデガン持参。終日一人で店番。予約 2 組。帳簿。小比企行きの振袖などの使わない衣装の梱包。流し台下の洗剤の整理。明日は俺の休み日。明後日は撮影 3 組予定。

夜、『高音』と『pur』を再読推敲。テキストの流れは流れとしてあって、かく流れることで明瞭に透明なもう一つの空間がテキストとともに開かれている、このことを一貫していいただけけれど、誰一人としてそのことについて賛否は別にして発言するものはいない。この日記の中で思いっきり陳述したいものだと思切に思うこともあるが、うまくいえるかどうかわからないし、屋上屋を架すきらいもある。ともかくやはり出版すべきなのだろうか迷う。来週あたりまでさらに考えよう。確信が湧いてくるといい。推敲はすでに何百回どころではない。

### 2017.5.4 (木)

晴れ。薄曇り。店は GW 休みなしで連日営業だが、俺は休み。朝早くから大工仕事。二階寝室からの外階段工事の続き。その後二階縁側の杉板を引越し後初めてネジ止めしてオイルスティン塗装。縁側らしくなった。



外階段の踏み板はすべて庭にも敷いた廃材の切れ端。オイルステインで塗装。これで縁側が裏山の道につながる。手すりを増設しなければならないかも。

床下倉庫の扉下に、浴室に使っていた廃物の蛍光灯をスイッチ付で設置。



夕方、自転車で近くを散歩。片倉城跡公園へは、湯殿川沿いの遊歩道からも入れる。芝生の後ろは意外と奥が深い山道で造成ではない谷の形にそって散策出来る。達思に言うとすでに探索済で知っているという。中央の広場には公園隣の喫茶店のおやじさんも認めるへたくそな彫刻が乱立していた。



散歩の出がけにふと振り返った玄関ホールの空気感に惹かれカメラを向けた。普段は数歩で通り過るばかりの空間だが、見えない主みたいなやつがいるみたいだ。もっと有効に使えると言っているのかいな。

2017.5.5 (金)

晴れ。撮影2組。達思早帰りで店番は俺が交代。出勤前の朝、15年前になろうか西葛西で買った硬木を電ノコで切断しパイプの塑型を作る。カッターナイフで削る。穴は6ミリ、3.5ミリのドリルで。大きすぎて失敗。2本目はなんとか。

閉店後、古本屋に寄る。アンリー・ミショー『プリュームという男』(『Aの肖像』)を買う。750円。布貼装丁。社会はもちろんすべての外力を外圧と感じて奴隷的とも見える無抵抗のスタンスを貫く男の話。しかし絶望とは無縁で「ごもつとも、ごもつとも」というセリフが表す皮肉とも仄かな希望にも似た反抗心を漂わせる身振りは、カフカやカミュにも通じる。さらにクレジオ『愛する大地』で描かれた砂漠を彷徨う青年をも想起させる。彷徨は結局果てもなくしかも何も起きない強固な日々等に等しく、そのために『Aの肖像』は緻密な文体で固められている。

夜、パイプにウオールナットのオイルスティン。庭木といい、身近なものたちが次々に形を整えていくと気分がいい。この日記もそうだが、アイデンティティとやらが埋まって変容していくことはいいことにちがいない。今までになく息遣いも強くなると感じる。

パイプは削りすぎて細くなってしまった。また作り直した。